

## 歴代誌第二26章5節 「人から受ける影響」

### 1A 第一に求める主

1B 垂直と水平の関係

2B 他者への霊的影響

3B 魂の健康

### 2A 強い時の危うさ

1B 神からの独立行動

2B 神に拠らない奉仕

### 3A 叱責と悔い改め

## 本文

歴代誌第二 26 章を開いてください。私たちは聖書通読の学びをしていて、前回、24 章まで学びました。午後礼拝にて、25 章から 28 章までを読みたいと思います。今朝は、26 章 5 節に注目します。

彼は神を認めることを教えたゼカリヤの存命中は、神を求めた。彼が主を求めていた間、神は彼を榮えさせた。

私たちは続けて、ユダ王国に歴代の王たちの人生を学んでいます。今読んだ箇所は、ウジヤという王のことです。ウジヤは、神を認めることを教えた、つまり神を恐れ敬うことを教え諭したゼカリヤという人がいる間は、彼は神を求めたということです。そしてウジヤが主を求めていた間は、神は彼を榮えさせました。

### 1A 第一に求める主

歴代誌において、歴代の王がどのような生き方をしたのか、それを記録の初めに端的に述べているので分かり易いです。午後に学ぶアハズ王については、「彼はその父祖ダビデと違って、主の目にかなうことを行わず(28:1)」とあります。そしてアハブの父、ウジヤの息子ヨタムについては、「彼はすべて、主の目にかなうことを行った(27:2)」と言っています。人の目ではなく、天地万物を創造された神の目にどのように生きてきたか、それを端的に述べています。私たちは、生まれつきの私たちは、人の目にかなうことを行おうとする人生を生きてきますが、いつかの時点で、天地万物を造られた神の目に自分がかなうことを行っているのか、という悟りが与えられ、それで回心してイエス・キリストを信じます。ウジヤにおいては、「神を求めた」という良い人生を送りましたが、「ゼカリヤの存命中は」という但し書きが付いています。神を求めた人生であったけれども、途中から主から目を逸らしてしまった人でありました。

「主を求める」という言葉も、歴代誌第二において頻繁に出て、それがこの書物の主題です。ソロモンの息子、レハブアムについては、「彼は悪事を行なった。すなわち、その心を定めて常に主を求めることをしなかった。(12:14)」とあります。アサ王については、「もし、あなたがたがこの方を求めるなら、あなたがたにご自身を示してください。(15:2)」と預言者が彼に話しました。主を求めるか、そうでないかをいつも問われているわけです。

何かを求める、探究するというのは、「情熱ややる気をもって、意志を用いて事を成し遂げる」こととあります。パソコンをお使いの方は、「インターネット・エクスプローラー」を使っている方は多いと思います。Explore という英語から来ていますが、「探検する、探究する」という意味です。自分が一日の最後に残した履歴によって、自分が何に興味を持ち、何を願って求めているのかが自ずと明らかになります。この願ったことを、主ご自身にすることが、「主を求める」ことです。つまり、主ご自身を自分の情熱ややる気にします。主ご自身と、主に関する事柄が自分の情熱であり、自分の意志を用いて、この方を喜ばせようとしています。

#### 1B 垂直と水平の関係

それでイエス様が弟子たちに命じられました。「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。(マタイ 6:33)」ここでのイエス様の言葉で大事なものは、「まず第一に」にあります。優先順位の話をしています。神とその義を優先順位で第一とするなら、他の事柄はすべて付随して与えられる、ということです。

私たちの人間関係を考える時に、私たちはいつも人間関係という水平の関係の前に、神との関係という垂直の関係を考えなければいけません。垂直の関係がしっかりすれば、水平の関係はぐらつきません。エペソの手紙には、いろいろな人間関係に対する勧めがありますが、夫婦の場合は、「教会がキリストに従うように、妻もすべてのことについて、夫に従うべきです。(5:24)」とあります。その人とキリストとの関係が、そのまま妻と夫との関係に反映されていくのです。同じように、「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。(25 節)」とあるように、キリストと自分との関係が、そのまま自分と妻との関係に波及するのです。

したがって言い換えると、他の人々との関係は、自分が今、主との関係においてどのような状態にあるのかを示す指標となってきます。もし、私が他の人に敵意を抱いていたら、私は神を愛していると言えるでしょうか？いいえ、私が兄弟を憎んでいれば、その兄弟を造り、その兄弟を愛しておられる神をも憎んでいることとなります。しばしば誤解されるのは、主の祈りにおいて、「我らが罪を犯す者を我らが赦す如く、我らの罪をも赦し給え」という言葉について、「私が人を赦さなかったら、神は私の罪を赦してくださらないのか」と読んでいます。いいえ、違いますね。自分が他の人を赦さない時に、実は自分が神の赦しについてないがしろにしていて、自分のとてつもない罪を神が帳消しにしてくださっていることを忘れていて、ということです。自分自身が神の赦しの中に留まっていないので、他者を赦さないのです。そのために、神の赦しではなく、神の容赦ない裁きの中

に自らを置いてしまっているということに他なりません。ですから、人との関係は、神との関係を自ずと示すものになっています。

## 2B 他者への霊的影響

そして先ほど話しましたように、ウジヤは、「彼は神を認めることを教えたゼカリヤの存命中は」神を求めた、とあります。ゼカリヤという人は、おそらく祭司であったと思われます。預言者イザヤが新たに男の子を生む時に、その証人として祭司ウリヤとゼカリヤを立てる、と主は言われました（イザヤ 8:2）。したがって、祭司ですから、ゼカリヤはウジヤに神の律法について、神の言葉について教えることができる人であり、神を恐れ敬うことを教え諭すことができたのです。

ゼカリヤは、ウジヤにとって信仰の模範でした。霊的に大きな影響力をゼカリヤがウジヤにもたらしていました。ウジヤはゼカリヤを、自分が教えを受ける教師として敬っていました。私たち人間は、実は常に、互いに影響を、良くも悪くも与えています。自分が神を知る時に、自分がイエス様に従っていくときに、この人を神は用いてくださったという人がいます。また同じように、自分自身が他の人に霊的な影響を与えています。自分は人から霊的な影響を受け、そして他の人に霊的な影響を与えているのです。

パウロはテサロニケの人たちに対して、「あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちと主にならう者になりました。（1テサロニケ 1:6）」と言いました。そしてテサロニケの信者たちも、「こうして、あなたがたは、マケドニヤとアカヤとのすべての信者の模範になったのです。（7節）」となって、人々に影響を与えていたのです。

私は、いつも覚悟を決めています。誰かと交わりをすると決めていれば、交わりのためにその人を敬い、その人から主を学んでいくと決めれば、必ずその人から影響を受けるということです。アメリカには、私の尊敬する牧師や聖書教師がいます。私の説教の仕方は、おそらくチャック・スミスと、デービッド・ホーキングの影響を受けています。若い時に教わった人だからです。デービッド・ホーキングは、あの広いカルバリーチャペル・コスタメサの教会で賛美をすると、必ずどこにいるか分かるほど、声が大きいです！私の声はもともと大きいのですが、神の御言葉については確信を持ちなさい、神に信頼を置きなさい、ということをしつかりと教えてくれました。だから、大きな声になっていきます！

もちろん真似なくていいのですが、自然とその癖までも似てきてしまいます。日本においては、自分を友と仰ぐ、同じ牧師や宣教師の何人かと日ごろから接して付き合っています。必ず、その兄弟たちの影響を受けているはずで、御言葉を分かち合っ、祈りあって、主から与えられた幻を分かち合うのですから、当然のことです。だからパウロは、悪い友をつくるなと戒めました。「思い違いをしてはいけません。友だちが悪ければ、良い習慣がそこなわれます。（1コリント 15:33）」

### 3B 魂の健康

次にウジヤについて見ていきたいのは、「神は彼を榮えさせた。」というところです。先ほどのイエス様の言葉にも、その約束がありました。「そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」ここで大事な言葉は、「それに加えて」であります。自分自身が主との関係に心を使っていれば、その他の事柄に対する関わりは主がすべて世話をしてくださる、ということです。これほど、単純なことはありません。

数多くある発言の一つとして、「私は人生や生活で整理が着いたら、それから神のところに行きたい。」というものです。ずっと前の話ですが、大学生のクリスチャンの集まりに招かれまして、行きました。そこに、結構長いこと教会に通っているのに、まだ信仰を持つことができない男性がいました。かなり真面目そうな人でした。こう言いました。「大学生の時に信仰を持つことになっても、一般社会に出た時にきちんと信仰を保てるかどうか分からない。だから一般社会に出てから、自分が信じる準備ができたなら信じようと思う。」私は驚きました。人生について考える時間のある、自由な大学の時代の時にそれだけ思い煩っているなら、社会人になったらなおさらのこと、信仰を持つことが難しい、と思いました。

そうではありません、神に対する考え方を正反対の方向に考えないといけません。自分の生活がきちんとしてから神のところに行くのではなく、神のところに行ってから、神がその生活をきちんとさせてくださるのです。自分が主との関係のみに集中していれば、主がその他の事柄は心配してくださいます。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。(1ペテロ 5:7)」

イエス様が語られた、「これらのものはすべて与えられる」というのは、食べること、着ることなど、物質的なこと、自分の体にかんすることについてです。霊的な事柄を第一にすれば、物質的なこと、肉体に関することにも祝福があります。ウジヤは主を求めたので、主は確かに彼を榮えさせました。

ウジヤは、周囲の敵と戦い、これらに打ち勝ちました。7 節には、「神は彼を助けて」とあります。神がウジヤを助けられて、周囲の国々に打ち勝つことができ、彼らはユダに貢物を持ってきました。さらに彼はエルサレムの城壁を強固なにもにしました。そして荒野に水溜をたくさん作りました。農業も発展させました。さらに彼の側近には精鋭部隊がおり、さらに当時の先端技術を駆使した兵器も開発しました。そして彼の名声は遠くにまで鳴り響いた、とあります。結論として 15 節に、「彼はすばらしいしかたで、助けを得て強くなったからである。」とあります。

ヨハネの手紙第三 2 節に、「愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。」とあります。魂への幸い、それから全ての点における幸いと健康を使徒ヨハネは祈っています。これは、主を第一としたらいつも健康でいられる、というご利益信仰、繁栄神学のことではありません。自分が主を第一としていたら、宝くじでも当たってお金が入る、というものではありません。むしろ、魂への幸いのために、宝くじを神は外れさせる

ことでしょう。勞しないで得た富によって、自分の生活に狂いが来ることがないように、神は宝くじを外れさせることでしょう。

そうではなく、神を第一として生きていたら、たとえ病気になっても、たとえ経済的に逼迫しても、その中で生きていく知恵と力を与えてくださるということです。パウロは言いました。「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。(2コリント 12:9)」体に悪魔からの棘が与えられたパウロですが、その肉体の弱さをパウロはむしろ誇ったのです。そこにキリストの力が働き、神の恵みが十分にあるからです。さらに、「私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っていません。(ピリピ 4:12)」と言いました。

## **2A 強い時の危うさ**

しかしウジヤは、主を求めることを途中でやめてしまいました。16 節を読みます。「しかし、彼が強くなると、彼の心は高ぶり、ついに身に滅びを招いた。彼は彼の神、主に対して不信の罪を犯した。彼は香の壇の上で香をたこうとして主の神殿にはいった。」

強くなると心が高ぶる…いつも、付きまとう危険です。成功する時、物事が自分の願うとおりに順調に進む時、ことさらに大きな問題がない時、このような時に心が高ぶります。

### **1B 神からの独立行動**

いま見ましたように、神がウジヤを助けて、彼はすぐれた者となりました。ところが、それが自分の何か努力、自分の才能、自分の何かによって成し遂げらえたという錯覚を抱くのです。自分は何かできる、自分で考えて自分で行動していくのだ、という、神無しの、神を求めることなしの行動に出て行きます。

しかし、私たちは神から離れたら、他の人たちと同じように何もできなくなります。「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。(ヨハネ 15:5)」自分は自分でできると思った瞬間から、自分は道を見失います。

### **2B 神に拠らない奉仕**

ウジヤが行ったのは、神殿の中に入って、香壇で香を焚こうとしました。主は、ご自分に香を焚くのは、ご自分が選び、召し出し、そして聖め別った祭司のみに与えていた奉仕です。これを王が行うことは分を越えています。

使徒パウロは教えました。「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおののに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。(ローマ 12:3)」主に

対するあらゆる奉仕は、神が分け与えてくださった信仰の量りによって行います。つまり、主が呼んでくださり、主が行いなさいと命じられて、主によって行うのが奉仕です。したがって、主がその人に与えておられる持ち分があり、自分ができるのだと思ってやっていく人間的な試みはすべて高ぶりとみなされます。

私たちが教会において、またクリスチャンの集まりにおいて、「自分は、今与えられている能力を使って、この教会を良くしていくのだ。」という思いをもって行ったら、とんでもない間違いです。教会は自分が能力を発揮するところではなく、また自分が不満をぶちまけたり、気晴らしをするような自分中心の集まりでもなく、キリストが頭であられ、キリストにつながって、キリストに命じられて、キリストに仕える、僕たち、召使たちの集まりです。ですから、神に呼ばれた、神にこのようにしなさいと命じられた、そのような召しがあるからこそ、神の恵みによって奉仕をすることができます。自分のやりたいことではなく、主が行いたいことに自分がひれ伏すのです。

### **3A 叱責と悔い改め**

そこで祭司アザルヤが、「主に香をたくのはあなたのすることではありません。(18 節)」と戒めました。そこでウジヤが激しく怒りました。おそらく、「俺は王なのに、お前は私に指図をするのか。」と思ったのでしょう。そして彼はらい病に罹りました。らい病のままでしたので、彼は神殿には一切入ることができず、隔離された所で死ぬまでいなければならなかったのです。

けれども、もし彼がその叱責の言葉を聞いていたら、神は決してそんなことはされませんでした。しかしへりくだらないで、かえって激しく怒ったので、らい病に罹ったのです。もしかしたら、その後で悔い改めたのなら、癒しと回復があったかもしれません。主が叱られた時に、私たちはどのように応答するのでしょうか？「訓戒を大事にする者はいのちへの道にあり、叱責を捨てる者は迷い出る。(箴言 10:17)」主に叱られた時に、あるいは主が誰かをを用いられて叱責を受ける時に、罪の告白をし、悔い改めるなら、命を得ます。けれども、かえって怒るのであればウジヤのように迷い出てしまいます。私たちは神の取り扱いを受けたら、その場でへりくだって、告白するのです。そうすれば、主が引き上げてくださいます。

主は、一人一人を榮えさせたいと願われています。主を求めてください。そして主の中に留まっています。主は自分が思っているより、もっと多くを与えたいと願われています。主だけになってください、力強い神の御手でへりくだってください、主が高くしてください。叱責を聞く耳を持ちましょう、主は罪を告白し、それを捨てる者に深く憐れんでくださいます。人を貶めるのが目的ではなく、引き上げるのが目的ですから。